



第122号

2015年6月1日発行

千葉大学教育学部
同窓会〒263-8522
千葉市稲毛区弥生町1-33

戦後七十年に想う

千葉大学教育学部同窓会副会長

町田 義昭
(S41・3卒)

今年に入っているいろいろな場面で「戦後七十年」という言葉を耳にすることが多くなった。私自身が終戦直前(昭和十八年)の生まれなので、正に戦後の日本を生きてきたことになる。終戦直前のできごとは二歳未満であり、記憶の中に何も残っていない。母に良く聞いたのは、「空襲警報」が鳴ると「ぼくご・ぼくご」と片言で言っていたということである。防空壕に行けば、おっぱいが飲めるという理由だけだったようである。戦前・戦中・戦後と教壇に立たれた師範学校・女子師範学校出身の諸姉姉におかれては、激変する社会環境・教育環境に翻弄されながら子供たちのために邁進努力をされたことと思う。皆さんの苦勞と熱意に敬意を表するものである。

私が教育学部に入學した時には亥鼻の学部は既に無く、弥生町に移転した直後であった。当時は、一般

教養は稲毛、専門教育は弥生町でと、徒歩での行き来が二年間続いた。専門分野も教育学部と文理学部で受講する毎日であった。当時、植樹された木々は細く頼りないものだったが、現在、キャンパスにある桜・樺等は驚くほどの太さとなり、完備された建物の佇まいと共に歴史を重ねた大学の重みを感じている。

この七十年間に、六・三・三・四制による学校体系の改革、教育委員会制度、教科書検定制、学習指導要領に基づく教育、PTA組織等改革改善は枚挙に遑が無い。社会情勢も戦後混乱期、戦後復興期、高度経済成長期、安定成長期、バブル期、冷戦後・経済停滞期等々を経て現在に至っている。この間に教育学部を巣立って教職の道に進んだ方々の情熱と努力のおかげで、現在の大人たちがあり、育ちつつある子供たちがいる。自信を持って歩んでいきたい。

教育学部附属幼稚園は千葉教育会附属幼稚園(明治三十六年創立)をルーツに、本年百十二年を迎える。JRの駅前とは思えない豊かな園庭環境で、三歳児一クラス、四・五歳児各二クラス計百四十名の子供たちは生き生きと自らの生活を作り上げている。

職員は園長、副園長、各クラス担任教諭、養護教諭と事務官の

九名、園長を除く教員七名中五名は本学幼稚園教員養成課程出身であり、同窓会員。七名中四名は修士号と幼稚園専修免許を持ち、また四名は幼稚園と小学校双方で教育経験を持つなど、力量豊かな教員ばかりである。

園児への教育は優秀な教員と保護者の協力で円滑に進められ、PTA以外にも、お母さんたちの「ままあず」は歌や劇で、お父さんたちの「ぱぱあず」は園内の修理や力仕事などで、園の教育を支えて下さっている。



幼児教育の研究開発は本園の使命。四十年以上掲げられてきた教育目標を、時代に即し、平成二十三年より教育目標の改訂とそれに応じた

幼稚園教育のさらなる推進と
発展を目指して千葉大学教育学部附属幼稚園園長
(千葉大学教育学部教授)

中澤 潤

教育課程を研究し、公開研究会で発表してきた。新たな教育目標は、「うごく、かんじる、かんがえる」。さらに平成二十六年度は文部科学省「幼児教育の改善・充実調査研究」を受託し、全国の国立附属幼稚園と共同研究を行った。

本園は学部の附属園として、幼稚園課程学生の教育実習指導、幼稚園課程、小学校生活科、中学校家庭科学生への授業参観、学生の卒論・修論や学部教員の研究協力も行っている。地域の幼児教育振興も本園の役割。毎年の公開研究会と隔月の千葉乳幼児教育研究会(幼児教育教室と共催)は、県内外の幼稚園教員、保育士、幼児教育行政官、幼児教育に関わる大学研究者の交流の場である。教員は、県・市の子供行政の委員や、各地の幼稚園研修会講師として幼児教育支援に努めている。平成二十七年から子ども・子育て三法が実施され、また幼児教育の無償化や義務化の声も聞かれ、幼児教育に大きな関心が向けられる現在、日本を代表する幼稚園として本園の役割は大きく、教職員一同、その使命を自覚し、さらに毎日の保育の充実と、新たな幼児教育研究に邁進している。

授業研究

印象批評からの脱皮を

生 稲 陽 一

(S 46・3 卒)

安房地方



二〇〇九年三月、退職と同時に、南房総市で若手教員等の授業指導員を、その後県教委の若手教員育成推進員を務め、たくさんさんの授業を参観し、協議会に参加した。

これまでも、そう思うことが多かったのだが、授業についての話し合いが印象批評に傾きがちである。すなわち、「子供の発言が活発だった」「授業者の日ごろの指導のよさが出ていた」「だいたいの子ができていた」などである。これでは十分ではない。授業の評価は、個々の子供の目標の達成度で判断されるべきものであろう。

私は参観する場合、下の様な授業メモをとる。記録は、授業者と子供の発言のすべて。発言や行動への評価のコメント。経過時間。座席表に発言回数や内容・達成度のメモ。特徴的な思考パターン等。目標を達成したのは人数を示し、その原因の考察を記す。加えて板

書やノートの画像、授業のポイントを評価、それからA3一枚にまとめ、後の協議会・講評で提示するのである。具体的な事実に基づいて助言をする。

例えば「授業者がしゃべり過ぎ」というのは、授業メモを提示するだけで本人が自ずと気づく。発言は活発であったが、実は一部の子供たちしか発言していなかったこともわかる。

このように、具体的な事実をもとにして、目標の達成度を話題にする授業研究協議会が行われることを期待する。



学校現場へ

学校と行政と

初 谷 幹 夫

(S 44・3 卒)

木更津市



この三月、木更津市教育委員会での仕事を全て終えた。昭和四十四年千葉大学を卒業、運よく地元の小学校教育員に採用されて以来、四十六年間一貫して教育に携われたことは教育学部に学んだものとして幸せであった。四十代からは学校と行政を交互に勤めることとなったが、今振り返ってみても思うことは様々である。学校と行政の関係についてはよく考えさせられた。

両者は、しばしば「学校現場と行政」として対比的に語られる。しかし、学校と行政とは、川を挟んで互いに対岸にあるというような関係ではなく、ましてや上下の関係でもない。学校は教育行政の最先端に在って、当然行政機関の役割を担うことになる。管理職、学校事務職員は勿論全ての教職員が行政感覚を持つことが望

ましい。行政もまた、学校の感覚を見失わないことが求められる。市町村の教育委員会は、保護者や地域、つまり納税者に最も近い。教育要望は多岐にわたり具体的に、議会での質問も集中する。教育委員会事務局には学校から先生方を多数派遣頂いており、その専門性と、児童生徒・教職員に関する深い理解を踏まえて様々な施策と格闘している。やがてまた学校に帰ってきた時、行政での経験が一層生かされることになる。

家庭と地域と学校（行政）のトライアングルについても述べてみたい。

教育は学校だけが頑張ってみても限界がある。三者の連携協力が強く求められるところである。しかし、その中心は常に学校でなくてはならない。

格差の拡大、子供の貧困が大きな社会問題となっている今、子供が自分に絶望するようなことをさせてはいけない。人生に希望を持たせ、自力で人生を切り開く力と知恵を伝えること、教育の機会均等を保証することは、公教育、特に義務制小中学校教育に携わる全ての者の責務である。

特別寄稿



素材を生かして社会に役立つ

原田 真理

(H元・3卒 千葉市)

定年まで小学校教師を続け、ずっと子供たちと共に歩む、そう信じて疑っていなかった。なりたくなつた教師。子供たちとの充実した毎日。担任を持ちながら高学年の音楽も担当し、全校集会で校歌も歌わなかった学校に子供たちの歌声を取り戻した。運動会の鼓笛隊パレードの復活、全校ダンスの振り付け、毎回ビリだった地区の音楽会では、自作曲をリコーダーアンサンブルにアレンジし四年生全員を舞台に乗せて合奏し、三年連続最優秀賞を頂いた。子供たちと共に遊び学ぶ、多忙ながらも本当に充実した毎日だった。

ところが、二年目の夏休みにひよんな事から記念受験したオーディションがきっかけで人生が百八十度変わる。千葉市制施行八十周年記念ミュージカル「夢のワインランド」でヒロイン合格。春休みの公演まで休日は稽古。公演が終われば普通の教師に戻るはずが：心の中にぽっかり穴が。悩み抜いた末、今しかできない事をやろう、

一生後悔したくない、と退職を決意。周囲の猛反対を押し切り退職するまで一年かかった。まず地元劇団に所属しアルバイトをしなからレッスンと稽古の日々。一年活動後、音楽座のオーディション合格。プロの俳優として東京を始め全国を旅公演した。三年活動したところで劇団解散。仕方なくオーディションを受けプロデュース公演に出たり、自分たちでライブ活動をしたりした。もちろんアルバイト生活。やはり劇団でなければ駄目だ、全員が同じ方向を向いて作品作りしないと良い舞台にならないと分かり、それならばと日本が一番大きい演劇集団の劇団四季のオーディションを受け一発合格で入団。当時の最新作「美女と野獣」のヒロインのベル役に抜擢され主演デビュー。その後ミセス・ポット役、タンス夫人役。「ライオンキング」では座内のオーディションを勝ち抜きオリジナルキャラクターとして東京初演を務め、その後ラフィキ役、シェンジ役。「オ

ペラ座の怪人」「ウインキッド」「キヤッツ」とメインとして出演が続き、現在は最新作「リトルマーメイド」でアースラ役を演じている。



生の舞台

はやり直しがきかない。常に緊張と集中を強いられ、一瞬たりとも気の抜けない世界だ。特に劇団四季では完璧にできて当たり前、プラスαを求められる。肉体的にも精神的にも万全の状態を保っておかないと、毎日の舞台にとっても対応できない。徹底した自己管理、毎日のレッスンと体調管理のための食事と睡眠のコントロールはアスリート並みだ。肉体的にも精神的にもハードで正直苦しい時もある。でも、カーテンコールでお客様の笑顔と感動の涙と惜しみない拍手を頂いた時、全ての苦労も一瞬で吹き飛び報われる。かけがえないこの一瞬のために努力を続けるのが俳優だ。

ふと気づくと劇団四季に入団して早十九年目。どれだけ研究し努力し続けてもこれで良いという終わりが無いことが舞台に立ち続け

る原動力となっているのだろう。

劇団四季の社会的活動の一つ「美しい日本語の話し方教室」では、都内や近郊の小学校に授業しに行く。言葉を大切にする劇団四季が美しい日本語を話すための方法を俳優の訓練の一部を紹介しつつ子供たちにも実践してもらい、



最後には全員で一緒に歌う。学級崩壊や社会性の薄い一部の子に手を焼いている学級も多い。俳優として身につけた表現力を

武器に大胆に子供たちの中に入り、テンポ良く進める。態度の悪い子が目を輝かせ大きな声で歌ってくれた時は本当に感動する。教師を経て俳優となった私だからこそできる授業。充実の時。人は自分という素材を社会のためにどう生かせるかだと思う。誰でも得意分野があり適材適所がある。子供たちが自分の素材を知り、この世で果たす役目に気づき、得意分野を生かして社会の役に立つ人になって欲しいと願い活動し続けた。